

2014年7月13日 第2主日礼拝  
説教 『主の祈り』を知っていますか  
マタイの福音書6章7-13節

【福音の要約】

2世紀の神学者にテルトゥリアヌスという人がいます。この人の有名なことばに、「主の祈りは<福音の要約>だ」というのがあります。神さまの福音、主イエスによって実現した福音の急所が、主の祈りを 祈り、主の祈りを 生きるなら、実現する、そう言ったのです。

主の祈りは、神さまへの呼びかけで始まります。「天にいます私たちの父よ」(9)と。ある人が、この呼びかけは、「<福音の要約>の要約だ」と言いました。ここは、単に祈りの始まりのあいさつの部分ではない。ここに福音が集中している。そういうのです。

神さまを「父よ」と呼ぶ。神さまが父なら私たちは子。神さまの子ども。考えてみれば、これは、たいへん大胆な言葉。なぜ、そんなことが言えるのでしょうか。それは主イエスが、十字架に架かってくださったから。だから、この呼びかけは、「<福音の要約>の要約」。主イエスの十字架によって、神の子とされていることの喜びを大胆に告白するものなのです。

私たちが神の子とされたのは、私たちが良い人であったからではありません。むしろ、何度も何度も神さまのみこころからはみ出してしまおう私たちです。けれども神さまは、何度も何

度もはみ出す私たちを、何度も何度も何度もはみだして下さって覆ってくださった。それが十字架。神である主イエスが十字架にまではみ出してくださった。そして私たちが神の子としてください、「父よ」と祈ることを教えてくださいましたのです。私たちには、はっきりと語りかける相手があります。それは、私たちを愛し、御子をさえ惜しまなかった天の父です。

【神の子の生き方】

神の子とされている私たち。私たちは神の子は何のために生きるのでしょうか。「御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように」(9-10)。

呼びかけのあとの最初の祈りは、自分のための祈りではありません。神さまの御名が、御国が、みこころが、と祈る。ここで思い出すのは、ゲッセマネの祈り。主イエスは、父から断絶される苦しみに悶えながら「しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」と祈られました。

神の子は、父のみこころがなされるように、と祈る。自分の願いが叶わなくてもよいから、父のみこころがなされるように祈る。神の子の祈りは、このような覚悟の祈り。厳しい祈り。

【だれのために】

けれども、その祈りは辛い祈りなのか。犠牲をとまなうばかりの祈りであるのか。そうでは

ありません。私たちはだれのために生きるのでしょうか。普通は三つの答が考えられます。①自分のため②人のため③神のため。この三つはたがいに対立するものだと考えられることが多いようです。

けれども、これがバラバラでない生き方。それが、クリスチャンの生き方。三つの人生の目的が、たがいに邪魔し合うのではなく、同時に達成されていく生き方、そんな生き方を神さまは与えて下さっているのです。

【幸いな人生】

ヨハネの福音書12章25節は、「自分の人生にしがみついていると、人生はだいなしになってしまうでしょう。しかし、もしあなたがそれを手放すなら、あなたは本当の人生をいつまでも保ち、しかも確実に、そして永遠に自分のものとすることができます」と、訳すことができます。手放すということは、神さまにゆだねること。神さまは、不思議なことをなさいます。人には出来ないことをなさるのです。それは私たちの人生を、ほんとうに自分のために、人のために、神さまのために生きることができるようになること。いつまでも、確実に、永遠に、そうして下さるのです。

自分をゆだねつつ主の祈りを祈り、生きること。そのとき、私たちは、成長することができます。さあ、ごいっしょに、主の祈りをさげましょう。